



Title	Wallace Stevens の海の寓話
Author(s)	大塩, 恵子
Citation	Osaka Literary Review. 1981, 20, p. 157-170
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/25590">https://doi.org/10.18910/25590</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## Wallace Stevens の海の寓話<sup>1)</sup>

大 塩 恵 子

“Life is an affair of people not of places. But for me life is an affair of places and that is the trouble.”<sup>2)</sup> そんな詩人自身の言葉どおり、Wallace Stevens の詩的想像力は専ら「場所」のイメージを契機に働くようである。“Fabliau of Florida”, “Anecdote of Canna”, “Two at Norfolk”, “Stars of Tallapoosa”, “Lions in Sweden”, Stevens の詩集を開くと地名を題に持った詩が多いことに気付く。実際彼の詩には、時には外国の、また時には非常に風変わりな様々な土地の名がちりばめられている。コネチカット州ハートフォードの町で保険会社の弁護士として生計を立て、北アメリカを離れては旅行することのなかった詩人にとって、詩の中にある地名の幾つかは彼が地図の上でしか知らなかった場所である。これらの「場所」は、詩人の現実の体験を読者に喚起するためではなく、むしろその固有の名前によって連想されるイメージと音の効果のために選ばれているようと思われる。これらの地名は、Stevens の詩によって、半ば現実で半ば空想の別の世界地図の中に場所を与えられているのである。

Stevens の詩の中に現われる固有名詞は、地名だけではない。彼の詩は一人称で語られることはほとんどなく、「私」とは別の人物を登場させ、三人称でその心の動きを描写したり、詩人が彼に呼びかける形を取ることが多い。そのような登場人物の名前もまた、Don Joost, Crispin, Peter Quince, Hoon などという風変わりで非日常的な、明らかに架空の人物であると思わせる名ばかりである。しかも彼らの個性的な名前にもかかわらず、これらの登場人物には、個性も、肉体を備えた人間としての存在感も希薄である。彼らは、それぞれの「場所」に置かれた人間の意識の、ある感性や思想の運動を表象するタイプとも言うべき存在である。

Stevens における、このような「場所」のイメージに対する執着や登場人物のかなり類型的な虚構性は、詩人の演劇的なものへの関心とも繋がりがあろう。彼の最初の詩集 *Harmonium*に収められた詩は、1910年代から20年代にかけて書かれたものである。<sup>3)</sup> それらの詩と平行して彼は短い劇の脚本を幾つか手懸けているが、それらの劇は総て、少数の登場人物と簡素な舞台装置から成る、Ibsen 風の心理主義リアリズムとは懸け離れた象徴主義的色彩の濃いものである。<sup>4)</sup> “Authors are actors, books are theatres”と、Stevens は言う。<sup>5)</sup> もし彼の詩集が言葉によって築かれた劇場であるなら、その中に登場する人物は、俳優である詩人の演ずる時に異なる役であり、詩人の意識の分身であるとも言えよう。そしてこれらの人々達の置かれる「場所」は、その中に登場する人物をも含めて、多分に演劇的な象徴性をおびた場面あるいはシーンと呼ばれるに相応しい。Stevens の詩的世界は、「場所」と登場人物の織りなす演劇的シーンにより成り立っている。

Stevens の「場所」はまた自然の「場所」でもある。自然詩人である Stevens には、主觀に対立する実在，“reality”の概念はあっても、複数の人間関係の集合としての社会の概念はなきに等しい。そこで彼の詩の中の自然の風景は、生物的な自然を表わすと同時に、個人の自我に対応する外的な世界全体をも象徴するという、二重の意味構造を持つことになる。

“There are men whose words/ Are as natural sounds/ Of their places”と詩人は歌う。<sup>6)</sup> 彼の詩の主題は人と人との関係ではなく、人と場所との関係、意識と世界との関係にある。Stevens が自分の詩に好んで“Anecdote”あるいは“Fabliau”という題を付けるのも、それらの詩が自然の一場面、意識の一つの体験を描いたものであるということの他に、それらの場面の持つ象徴的意味合いのゆえんでもあろう。こうして Stevens の詩における「場所」は、繰り返し用いられる太陽、月、星、四季、動植物などの様々な自然のイメージで飾られることになるのだが、中でも海のイメージは最も頻繁に使われるもののひとつである。特に第一詩集 *Harmonium*

と第二詩集 *Ideas of Order*においては、それぞれ “Comedian as the Letter C”, “The Idea of Order at Key West” という重要な詩が、いづれも海に向って立つ人物という、後の詩集にも幾度か現われる場面を描きながら、対照的な展開を見せてている。本稿では、これら二つの詩集から海のイメージの登場する幾つかの詩を選び、先に挙げた二作品と関連させながら、Stevens における “reality” の概念と “imagination” の働きについて少し述べてみたい。

“Tired of the salty harbors,/ Eager for the brine and bellowing/  
Of the high interiors of the sea.”<sup>7)</sup> *Harmonium*においては冒頭から、海はこのような憧れの対象として姿を見せる。

Her terrace was the sand  
And the palms and the twilight.

· · · · ·

The rumpling of the plumes  
Of this creature of the evening  
Came to be sleights of sails  
Over the sea.

And thus she roamed  
In the roaming of her fan,  
Partaking of the sea,  
And of the evening,  
As they flowed around  
And uttered their subsiding sound.<sup>8)</sup>

アメリカ北東部に住んでいた Stevens にとって、南部の海岸は砂浜と棕櫚の木々、船の白い帆に象徴される憧れの地であったのだろう。 “Infanta Marina”, 「海の子供」と呼ばれる彼女が夕暮のテラスで鳥の羽の扇を使しながら、そんな空想の海を呼び起こすと、彼女のテラスは海辺の砂浜に、羽の扇は沖に浮ぶ船の帆に変貌する、そして彼女はその海岸をさまようの

である。“I say now, Fernando, that on that day / The mind roamed as a moth roams, / Among the blooms beyond that open sand.”<sup>9)</sup> 以上の一節にもあるように、海と海に憧れ海に向う人間の意識とは、Stevens の詩の中で、海に向って立ち海岸をさまよう、あるいは船上から海を見つめる登場人物というシーンになって繰り返し登場する。では彼らは何を求めて海の許へやって來るのであろうか。

“Shine alone, shine nakedly, shine like bronze, / that reflects neither my face nor any inner part / of my being, shine like fire, that mirrors nothing”<sup>10)</sup> 明の明星の輝く様を歌ったこの詩にもよく表わされているように、Stevens の自然観に特徴的なことは、何よりもまず詩人が人間と自然との間の安易な共感を厳しく排除しようとする態度である。確かに Stevens の詩には自然をテーマにしたものが多いことから、彼は自然詩人としてよくロマン派の影響が問題にされる。しかし、Stevens の自然観と19世紀ロマン派詩人達のそれとの決定的な相違は、Stevens の自然が汎神論的ではないことにある。汎神論的な自然にあっては、自然に宿る靈はまた、人間の内なる心の秩序を司どる靈でもある。それゆえロマン派の詩においては自然と人間の間には静かな共感が存在し、詩人は喧噪に充ちた都会の生活から逃れ、彼の失なわれた精神秩序を取り戻すために再び自然の懷に帰るのである。けれども Stevens の詩にはもはや、自然と人間との幸福で自動的な共感関係はない。反対に Stevens の自然は、人間の主觀とは独立してその外部にあるリアルで即物的な存在、人間の安易な感情移入を許さない絶対的な客体として描かれる。明けの明星の輝きは、それを見つめる「私」に内在する何物をも反映すべきでなく、むしろ人間達の付与する一切の神話や意味や情念を拒んでいるからこそ美しいのだと詩人は言う。だが、このような自然はまた圧倒的に不可知なものであり、先に述べたような自然と人間との交流は成立し難い。

海と登場人物との関係も、Stevens の詩にあっては常に、共感ではなく対決，“confrontation”として表現される。

The doctor of Geneva stamped the sand  
That lay impounding the Pacific swell,

· · · · ·

Before these visible, voluble delugings,

Which yet found means to set his simmering mind  
Spinning and hissing with oracular  
Notations of the wild, the ruinous waste,

Until the steeples of his city clanked and sprang  
In an unburgherly apocalypse.

The doctor used his handkerchief and sighed. 11)

(下線筆者)

静かで静止したようなレマン湖畔の都市ジュネーブから来た医者は，“Lacustrine man”，すなわち「湖の人」と呼ばれる。<sup>12)</sup> 彼は湖のように深遠ではあっても、あまりに理性的で形式に捕われ過ぎた固定化した思想の持ち主である。太平洋の潮騒は、静的で秩序立った世界に住むこの医者には，“delugings”，「洪水」であり，“ruinous waste”，「人を破滅させる荒野」とも思われる。そして彼の精神の象徴であるジュネーブの町の教会の尖塔が音を立てて崩壊することを予感して、思わず溜息をつくのである。

第二詩集 *Ideas of Order* に収められた“Winter Bells”的ユダヤ人も、この医者と同様、凝固してしまった精神を持つ登場人物の一人である。

It was the custom  
For his rage against chaos  
To abate on the way to church,  
In regulations of his spirit.  
How good life is, on the basis of propriety,  
To be followed by a platter of capon!

Yet he kept promising himself  
To go to Florida one of these days,

And in one of the little arrondissements  
 Of the sea there,  
 To give this further thought.<sup>13)</sup>

ジュネーブの医者の精神が、湖と教会の尖塔に象徴される市民的秩序によって守られていたように、この人物にとっても、生は“custom”, “church”, “propriety”により“regulate”され秩序づけられるべきものと見做されている。彼は、“chaos”に対して激しい嫌悪を抱き、一切を秩序づけることによって彼自身の生を“chaos”から守ろうとするのだが、詩人は、“propriety”というブルジョワ的な規範に縛られた彼の生がもはや生き生きしたものではないことを皮肉っている。ここでも登場人物の束縛され形骸化した内面世界と対比されるのは、フロリダの海のイメージである。ユダヤ人は何時か海の辺りの一郡に赴き自分の思想を再点検するつもりである。その時彼もまたジュネーブの医者のように、自己の世界観が根底から覆されるような体験をするであろうことは想像に難くない。海はこれら的人物達にとり、憧れの対象であると同時に、洪水や荒野のごとき人力の及ばぬ自然の破壊力であり、市民的秩序を超えた“chaos”であるもの、人間の理性や知性による理解を拒否し、却ってそれらを脅かし破滅に到らせる恐ろしい存在でもある。

海はまた饒舌な存在である。ジュネーブの医者が海岸へ来て出会ったのは、彼の静的な内面世界に激しく対立する“voluble delugings”, 「おしゃべりな洪水」のような大洋であった。この海の饒舌は彼には全く理解出来ない“oracular notations”, すなわち不可解な表記法で表わされた人間に理解し得ない言語である。“The Idea of Order at Key West”においても、海のイメージは初め、精神も心も持たない単に物理的な肉体のそれである。

The water never formed to mind or voice,  
 Like a body wholly body, fluttering  
 Its empty sleeves; and yet its mimic motion

Made constant cry, caused constantly a cry,  
 That was not ours although we understood,  
 Inhuman, of the veritable ocean. <sup>14)</sup>

海は絶え間なく叫び声をあげ続けているが、眞に海のものであるこの叫びは非人間的で我々のものではない、と言われる。Stevens の詩では、しばしば “voice” と “sound” とが区別される。人間のものであり、人間にとつて意味があるのは、“sound” ではなく “voice” の方である。しかし “mind” を持たぬ海の叫びが、“voice” となることはなく、それはグロテスクな半人のそれのように不可解で無意味な “sound” に過ぎない。

“The Comedian as the Letter C” の主人公 Crispin は、ジュネーブの医者や “Winter Bells” のユダヤ人と同じく、海の前に敗北してしまう登場人物の系譜に連なる一人である。Crispin は曾ての移民達のように理想の実現を求めてヨーロッパからアメリカへ船出しながら、結局は卑俗な日常性の中に埋もれてしまう大言壯語の “Comedian” であるが、彼の計画とは、喧噪の海の側にそれにも増しておしゃべりな「コラム」を建てることにある。“Because he built a cabin who once planned / Loquacious columns by the ructive sea.” <sup>15)</sup>ここでの “columns” は、巨大な柱廊を備えた壮大な建築物を思い起させると同時に、海のざわめきをも圧倒する、新聞の寄稿欄の無益なおしゃべりをも指す。この詩の第一セクションは、Crispin がある日海を前にして古いヨーロッパの精神秩序に疑問を抱く所から始まる。

. . . is this same wig  
 Of things, this nincompanied pedagogue,  
 Preceptor to the sea? Crispin at sea  
 Created, in his day, a touch of doubt. <sup>16)</sup>

そうして Crispin は、アメリカへ向けて大西洋を船出して行くのだが、  
 What was the purpose of his pilgrimage,  
 Whatever shape it took in Crinspin's mind,

If not, when all is said, to drive away  
 The shadow of his fellows from the skies,  
 And, from their stale intelligence released,  
 To make a new intelligence prevail? <sup>17)</sup>

“[A]n aspiring clown”, 「大志を抱く道化」である Crispin の遍歴の目的は、詩人が “Nuances of a Theme by Williams” で歌ったように、明けの明星を一切の古い神話から解放すること、天から彼のお仲間である “pedagogue” 達の幻影を一掃して、天を彼らの古びた思考から自由にし、代わりに新しい思想を打ち立てることであった。<sup>18)</sup>

Could Crispin stem verboseness in the sea,  
 The old age of a watery realist,  
 Triton, dissolved in shifting diaphanes  
 Of blue and green? <sup>19)</sup>

海の老人トリトンのイメージは、先に挙げた “The Idea of Order at Key West” における海のイメージと似て、もはや一定の体の輪郭すら留めず波の間にばらばらになった手足を垣間見せている姿で描かれる。Edward Guereschi は、このトリトンが、後代の懷疑の前に既に時代遅れになつたロマン派の原型の一つであると指摘している。<sup>20)</sup> これは現実の実在である海の前に溶けて姿を隠してしまつた無用の神話、現実主義者と化した神なのである。ちょうどそのように、Crispin の古い自己も、海の変化する諸相の中で解体していく。

Just so an ancient Crispin was dissolved.

The salt hung on his spirit like a frost,  
 The dead brine melted in him like a dew  
 Of winter, until nothing of himself  
 Remained, except some starker, barer self  
 In a starker, barer world, . . . <sup>21)</sup>

## The sea

Severs not only lands but also selves.

Here was no help before reality.

Crispin beheld and Crispin was made new.<sup>22)</sup>

(下線筆者)

ヨーロッパとアメリカ大陸とを分断している海はまた、古いヨーロッパの価値感を無効にする、そんなありのままの現実，“reality”を象徴している。Crispinはアメリカへ渡り、海を超えることによって古い自己を捨て、もっとありのままで裸のままであるような自己に生まれ変わる。海は自我の再生を促す洗礼の水でもある。

“Adagia”は Stevens の死後出版された詩人のノートで、彼が折に触れて書き溜めていた、人生、芸術、詩や詩人の役割に関するアフォリズムが集められている。中でも多いのが、“reality”についての言及である。 Stevens にとっての詩人の役割とは、人々と彼らの生きている現実の世界との仲介者としてのそれであり、決して彼らをどこか非現実の彼方へ伴なうものではない。その意味で “reality” というのは Stevens の詩における重要な概念の一つである。“The ultimate value is reality.”<sup>23)</sup> “There is nothing in the world greater than reality. In this *predicament* we have to accept reality itself as the only genius.”<sup>24)</sup> しかし “Adagia” の中に “reality” の概念が非常に曖昧に見えるのは、“reality” に対してこれほどの価値を認める詩人が、同じ言葉に時に否定的な意味を与えていることに依る。“What reality lacks is a *noeud vital* with life.”<sup>25)</sup> “Reality” とは、人間の生に繋がる “*noeud vital*”, 「中枢部」を欠いた存在、自然と同様人間の意識の外にある、それ自体では意味を持たない混沌の世界である。そしてそのような “reality” より偉大なものが存在しないこと、それが人間の “*predicament*” であり、海を前にした登場人物達の苦境なのである。“The Comedian as the Letter C” で Crispin が海の洗礼を受けるのは第一セクションであったが、このセクションには、“World without Imagination” という副題が付いている。海岸で壮大な建築を計画した

Crispin は、結局貧相な “cabin” に住み, “Philosopher, beginning with green brag,/ Concluding fadedly,” と言われる道化に終ってしまう。<sup>26)</sup>

America was always north to him,  
 . . . . .  
 And thereby polar, polar-purple, chilled  
 And lank, rising and slumping from a sea  
 Of hardy foam, . . . <sup>27)</sup>

Crispin の見い出した新天地アメリカは、先の “Infanta Marina” で歌われた南国の豊かな海景とは程遠い、極地の痩せて寒々とした光景であった。余りにも空虚な世界を前にして、人は自らの卑少さを認識する他手だてがない。

“Imagination is the liberty of mind and hence the liberty of reality,”<sup>28)</sup> Stevens の言う “reality” がそれ自体では意味を持たず、自然がそれ自体では言霊を持たぬ、ただ叫び声をあげ続けるだけの存在であるなら、人間と自然、意識と世界の間には、不可知論的な断絶しかないであろう。“The Doctor of Geneva”, “Winter Bells” そして “The Comedian as the Letter C” においては、海という決定的に不可知な存在を前にして、登場人物達がそれまで信じていた世界観は完全に無効なものとなり、彼らもまたや世界を把握する術を知らない。そんな世界と人間との間の仲介者となるのが詩人の役割、“imagination” の働きである。“Oh! Blessed rage for order, pale Ramon, / The maker’s rage to order words of the sea,” “The Idea of Order at Key West” は、海の饒舌に言葉を与え、無意味な混沌である “reality” に意味を与え得る新たな「秩序への渴望」であるよう、人間の “imagination” への讃美である。<sup>29)</sup>

想像力の入り込む余地のない世界であった Crispin のアメリカが、北国の荒涼たる世界であるのに反し、“The Idea of Order at Key West” の舞台はキイウエスト、フロリダ半島南方の島にある、合衆国最南端に近い町である。そこで「私」と「青ざめたラモン」と呼ばれる二人に秩序の理念

を与えるのは、海岸を歌いながら歩く一人の女の姿である。詩は、彼女の歌が世界と海のイメージを変容させていく過程を描く。第一連では、先の引用13にある混沌の叫びをあげる海が描写され、第二連では、彼女は彼女の聞いた海の叫びを歌にしていることが語られる。

The song and water were not medleyed sound  
 Even if what she sang was what she heard,  
 Since what she sang was uttered word by word.  
 It may be that in all her phrases stirred  
 The grinding water and the gasping wind;  
 But it was she and not the sea we heard. <sup>30)</sup>

たとえ歌の中に波の音、風の音が起ろうと、彼女に歌われることに依ってそれらは海の叫びであることを止め、一語一語意味を持った彼女の声になる。第三連では、彼女の歌に歌われているものは何か、それは誰の魂を歌うのか、“Whose spirit is this?”という問い合わせが発せられ、そして第四連でその答えが出される。<sup>31)</sup>

If it was only the dark voice of the sea  
 That rose, or even colored by many waves;  
 If it was only the outer voice of sky  
 And cloud, of the sunken coral water-walled,  
 However clear, it would have been deep air,  
 The heaving speech of air, a summer sound  
 Repeated in a summer without end  
 And sound alone. But it was more than that,  
 More even than her voice, and ours, among  
 The meaningless plungings of water and the wind, <sup>32)</sup>

もし彼女の歌が「海の声」あるいは「空の声」であったなら、それは単なる空気の言葉であり意味のない“sound”に過ぎない。しかし彼女の歌はそれを超えたものである。さらに海の叫びを歌った歌は、彼女のそして我々人間の“voice”以上の存在もあるのである。こうして彼女の歌は、主

体である人間のものでも、客体である海のものでもない、主体と客体の区別が消え両者が結ばれる、新たな“imagination”の世界を創り上げて行く。

She was the single artificer of the world  
 In which she sang. And when she sang, the sea,  
 Whatever self it had, became the self  
 That was her song, for she was the maker. <sup>33)</sup>

海は「創造者」となった彼女の歌に依って新しい自己を与えられ、人は“imagination”依り初めて、混沌の海の前の敗北者であることを止め、海をそして“reality”を変容させる力を持つ。

以上、Wallace Stevens の詩に描かれた海と登場人物のシーンから、“chaos”である現実の前に敗北する人間と、その現実から“imagination”的力で新しい世界を創造する人間という、Stevens における人間の意識と世界の関係の二つのパターンを分析した。海は Stevens には、憧れと恐怖の対象、自然の饒舌と破壊力であり、また人間の意識が向き合う混沌とした“reality”でもあった。最後に、このように人間の思想を破壊し再生させる、また人間の“imagination”に依って変容される海の刻々と変化する性質が、“undulation”, “undulating”という波のうねりのイメージで表わされることを挙げておく。

Let the place of the solitaires  
 Be a place of perpetual undulation.

Whether it be in mid-sea  
 On the dark, green water-wheel,  
 Or on the beaches,  
 There must be no cessation  
 Of motion, or of the noise of motion,  
 The renewal of noise  
 And manifold continuation;  
  
 And, most, of the motion of thought  
 And its restless iteration,

In the place of the solitaires,  
Which is to be a place of perpetual undulation. <sup>34)</sup>

“The Comedian as the Letter C” の Crispin は、海の動きを把えることに失敗した偽の哲学者であったが、ここでは Stevens は、世捨て人に波のうねりを見つめ、そこに変容する “reality” の姿とそれを把える思想の再生を見い出す瞑想者となるよう促している。そしてここに現われた海のイメージは、“imagination” と “reality” の相互作用に依って絶えず変化を繰り返す、生そのもののイメージであると言うことが出来よう。

### 注

- 1) 本稿は昭和56年1月24日大阪アメリカン・センターで開かれた第10回英文科大学院生研究懇談会で口頭発表した原稿を補正加筆したものである。
- 2) Wallace Stevens, “Adagia”, *Opus Posthumous*, ed. Samuel French Morse (New York: Alfred A. Knopf, 1957), p. 158.
- 3) 以下の詩集は總て Wallace Stevens, *The Collected Poems of Wallace Stevens* (New York: Alfred A. Knopf, 1954) に収められている。
- 4) “Three Travelers Watch a Sunrise” は1916年の *Poetry* に掲載され, “Carlos among the Candles”, “Bowl, Cat and Bloomstick” は1917年から18年ごろ書かれた。(Samuel French Morse, “Introduction” to *Opus Posthumous*, pp. xxvi-xxvii.)
- 5) “Adagia”, p. 157.
- 6) “Anecdote of Men by the Thousand”, *Harmonium*, 9-11.
- 7) “The Paltry Nude Starts on a Spring Voyage”, *Ibid.*, 8-10.
- 8) “Infanta Marina”, *Ibid.*, 1-2 and 6-15.
- 9) “Hibiscus on the Sleeping Shores”, *Ibid.*, 1-3.
- 10) “Nuances of a Theme by Williams”, *Ibid.*, 5-7.
- 11) “The Doctor of Geneva”, *Ibid.*, 1-2 and 9-15.
- 12) *Ibid.*, 4.
- 13) “Winter Bells”, *Ideas of Order*, 9-19.
- 14) “The Idea of Order at Key West”, *Ibid.*, 2-7.
- 15) “The Comedian as the Letter C”, *Harmonium*, V, 45-46.
- 16) *Ibid.*, I, 4-7.
- 17) *Ibid.*, IV, 10-15.

- 18) *Ibid.*, IV, 91.
- 19) *Ibid.*, I, 37-40.
- 20) ‘“The Comedian as the Letter C”: Stevens’ Anti-Mythologocal Poem’,  
*Critics on Wallace Stevens*, ed. Peter L. McNamara (Coral Gables, Florida:  
Univ. of Miami Press, 1972), p. 76.
- 21) “The Comedian as the Letter C”, I, 52 and 58-62.
- 22) *Ibid.*, I, 77-80.
- 23) “Adagia”, p. 166.
- 24) *Ibid.*, p. 177.
- 25) *Ibid.*, p. 178.
- 26) “The Comedian as the Letter C”, VI, 85-86.
- 27) *Ibid.*, III, 12 and 14-16.
- 28) “Adagia”, p. 179.
- 29) “The Idea of Order at Key West”, 52-53.
- 30) *Ibid.*, 9-14.
- 31) *Ibid.*, 18.
- 32) *Ibid.*, 21-30.
- 33) *Ibid.*, 37-40.
- 34) “The Place of the Solitaires”, *Harmonium*.